

「ドンドン、ドンドン」

自分の縄張りの目の前のガラスが強く大きな音を立てた。心地良い眠りについてた僕はなんとも言えない不快な音で目覚めた。僕はあくびをするようにエラに水を送ろうと口をパクパクさせる。そして僕は眠っていた穴から顔を出し、目の前の大きなぼやけた何かを見た。目が慣れるまで少し間を置くと、少年がキラキラとした目で僕を見つめていた。ガラス越しに見つめてくる少年の顔はとても大きい。その大きな口は僕なんかひと飲みにしてしまいそうで恐怖を感じ、ビクッと体を揺さぶって砂の穴へ再び潜った。僕の動きに気付いたのか、少年はその動きに返事をするように言った。

「大丈夫？また来ちゃった。今日も元気？」

僕はとりあえず口を大きく開けて威嚇する。この少年はいったい何が楽しくてチンアナゴの僕の所に頻りにやってきては話かけて来るのだろうか。

僕の威嚇に反応したのか、少年は笑いながら言った。

「びっくりさせてごめんね。今日も元気そうだね。相変わらず君は犬の狎に似ているね。名前の由来だけあって、ほんとそっくり。」

少年はポケットから犬の写真をだして言った。僕にチラッとその写真を見せてから少年はじっくり僕と写真を見比べていた。その写真の犬は僕ではなく隣の縄張りの穴に住むライバルの顔の方に似ているようだが…。

少年は突然腕時計を見てまたその大きな顔をグイッとガラスに近づけた。

「あれ、もうこんな時間。」と言い、去って行った。

「また来たなあの子。」となりにいるライバルは言った。

「うん」と僕は軽く返事をする。

嵐が去った後のように呆然としていると突然、赤い粉が降ってきた。

その粉を見た瞬間、僕も周りのライバル達も一斉に砂の穴から、赤い粉をめがけて体半分以上を押し出し、口を大きく開けた。食事の時間だ。この赤い粉はプランクトンであり、僕たちチンアナゴは水流を利用して流れにそって、そのプランクトンを食べる。いわゆる「流しそうめん」みたいな感じである。

食事に夢中になっていると、途中でニシキアナゴと絡まりあった。お互い睨みあったものの、食べるのに夢中で、喧嘩をする暇もなかった。

食事が終わると、今度は便意をもよおした。胴体の上の部分に大きな黒い点があり、僕のお尻の穴がそこにある。砂の外に出るのは落ち着かないけど、砂の穴では出せない。僕はきれい好きだ。

ふとあの少年のことを考えた。僕はまたあの少年に再び驚かされることに備え、自分の縄張りの警備を始めた。僕たちチンアナゴは縄張り意識が強く、別のチンアナゴが縄張りの中に入ると、口を大きく開け、相手を威嚇しては喧嘩を起こしている。この水槽の中には、僕達の他、ニシキアナゴとニシキアナゴと同じシンジュアナゴ属のホワイトスポテッドイールがいる。そして、顔を常に下にして泳いでいるヘコアユや、藻類を食べて、この水槽を綺麗にするマガキガイなどもいる。

縄張りの警備を行っているとあたりが暗くなった。僕は砂の穴に潜ったまま眠りについた。

どれくらいの時間寝ていただろうか。ふと目が覚め、砂から顔を出し、あたりを見渡すと、またあの少年がガラス越しに僕を静かに見ていた。僕はあまり驚かなかったが、いつものように威嚇を試みた。だけど僕はすぐに違和感を感じた。少年はいつものように笑って話しかけてこない。今度こそ僕はひとのみにされてしまうのだろうと身構えていると、少年はその大きな目から涙をこぼし、元気のない小さな声で話しかけてきた。

「やあ、また来ちゃった。元気かな？」少し間をおいて少年は涙を拭い、裏返った声で話しはじめた。

「来週引っ越すって言われちゃった。僕のお父さん知ってるよね？この水族館の館長だったんだ。でも、別の水族館に転勤するんだって。ひっこしたらもう君には会えなくなってしまうね。」

少年の声は弱く震えているのを感じ、僕は威嚇をやめた。僕はいつもの元気な声が聞きたくて、砂から体半分を出し、クネクネと体を揺さぶった。少年は、顔をガラスからはなして、大きな声で笑い出した。大きな声に驚いた僕は急いで砂の中へ引っ込んだ。

「本当に君はおもしろいね。この水槽の中で君だけがいつも僕の話聞いてくれたね。僕の家族は引っ越しが多くて僕には友達はいなかったけど、君が一番最初の親友なんだ。いままでありがとう。いつかまた会いに来るね。それまで元気でいてね。」

少年はしばらく僕を眺めた後、名残惜しそうに水槽から離れ、去っていった。

僕はその後、いつものようにガラス越しに少年を見ることは無くなった。隣のライバルが、「あの子もう来ないのかな。」と言った。

「うん。」と僕は小さく返事をした。

ある日、いつものように砂から顔を出すと、目の前に小さな少女が現れた。その少女は小さな優しい声で僕に話しかけた。

「こんにちは、チンアナゴさん。元気？」